

(3) てんさいの褐斑病

てんさいの褐斑病は葉に直径数 mm 程度の斑点を生じ、多発すると葉全体が枯死し、糖量が減収する。本年は6月中旬以降の高温により初発時期が早まった。夏季、秋季を通して気温が高く、発生量が増加し、道内全域で被害が認められた。本病の一次伝染源は前年の罹病残渣から飛散する分生子と考えられており、本年の多発生により一次伝染源は多くなると推測されることから、令和6年の発生に注意する必要がある。耕種的な対策としては、連作を避け、可能な限り抵抗性の強い品種の導入が有効である。

本病による減収被害を回避するためには、遅くとも初発直後までに薬剤散布を開始する必要がある。本年、オホーツク地方では6月中旬に初発が確認されるなど、例年より初発が早かったことから、散布開始にあたっては、地域での発生や発生予察情報を参考にし、計画した散布時期以前に発病が確認された場合には直ちに薬剤散布を開始することが重要である。また、Qol 剤、DMI 剤、カスガマイシン剤などで耐性菌の発生が確認されているため、薬剤の選択にあたっては防除ガイドを参考にし、マンゼブ剤を基幹とした防除を実施する。なお、マンゼブ剤の散布間隔は 14 日であるが、高温多湿の気象条件下では残効期間が短くなり、病勢が急激に進展するため、抵抗性が“やや強”以下の品種では散布間隔を短くする。



写真 多発圃場(中央農試 山名 原図)



写真 病斑(十勝農試 東岱 原図)